

Pawel Maciejko (パヴェル・マチェイコ) 先生講演会

“A Portrait of the Kabbalist as a Young Man: on Kabbalah and Giacomo Casanova”

(「ひとりの若者としてのカバリストの肖像:カバラーとジャコモ・カサノヴァについて」)

シンポジウム

A New Perspective on the Conversion of Sabbatai Zevi

(「シャブタイ・ツヴィの改宗についての新たな視座」)

報告者:

山本伸一 (東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了)

Jonatan Meir (ヨナタン・メイル、ベングリオン大学)

Pawel Maciejko (ジョンズ・ホプキンス大学)

司会: 志田雅宏

2025 年 3 月 6 日 (木) 10:00–17:00

法文 1 号館 217 教室

本学に外国人研究員として在籍され、10 月から研究室でシャブタイ・ツヴィのメシア運動やハシディズムについてのセミナーを続けてくださっているヨナタン・メイル先生のご発案で、講演とシンポジウムを開催しました。

午前の部ではメイル先生の友人で、ジョンズ・ホプキンス大学で教鞭を執られているパヴェル・マチェイコ先生に、近代のカバラーについての講演をしていただきました。講演ではヨセフ・カール・エマヌエル・フォン・ヴァルトシュタイン伯爵の肖像画に描かれた中世のカバラー文献『ゾーハル』の書物と、その下に書かれた「神の使徒ムハンマドの秘密」というアラビア語を手がかりに、18 世紀の西欧におけるカバラーの知識の広がりを明らかにしていく試みが説明されました。マチェイコ先生によると、これらのヘブライ語の書物やアラビア語の言葉は、シャブタイ・ツヴィをその棄教（イスラームへの改宗）後もメシアと信じる人々によるものでした。そして、フリーメイソンに関心を抱いていたヴァルトシュタイン伯爵は、西欧のあらゆる階級や階層の人々と交流をしていたジャコモ・カサノヴァから、『ゾーハル』やシャブタイ・ツヴィの支持者たちの信仰についての知識を得ていたのではな

いかと考えられるのです。

その意味で、ヴァルトシュタイン伯爵の肖像画は、17 世紀にオスマン帝国で起きたシャブタイ・ツヴィのメシア運動が、18 世紀の西欧における秘匿的な知として密かに広がっていたことを物語っているといえます。

(参考: Pawel Maciejko, “A Portrait of the Kabbalist as a Young Man: Count Joseph Carl Emmanuel Waldstein and His Retinue,” *The Jewish Quarterly Review* 106 (2016), pp. 521–576.)

午後の部ではメイル先生とマチェイコ先生に加え、シャブタイ・ツヴィのメシア運動についての博士論文で本学を修了され、『異端の鎖—シャブタイ・ツヴィをめぐるメシア思想とユダヤ神秘主義』（勁草書房、2024年）を上梓された山本伸一さんをお招きして、シャブタイ・ツヴィの改宗を主題とするシンポジウムを開催しました。

山本さんの報告では、シャブタイ・ツヴィのイスラーム改宗の歴史的な文脈として、17世紀のトルコにおけるカディザデリ運動（Kadizadeli movement）が取り上げられ、この運動がスーフィズムを批判する原点回帰的な性格を持ち、さらにユダヤ人をイスラームに改宗させる動きが広がっていたことが指摘されました。そのなかで、シャブタイ・ツヴィ自身もイスラームに改宗したものの、彼のメシア性を信じてサロニカでイスラームに改宗したドンメー教団はスーフィズムとの強い結びつきを持ち続けました。その伝統は、後にアブデュルハミト二世（在位 1876–1909）がシャブタイ・ツヴィを「スーフィーの聖人」と呼んだことからもうかがい知ることができ、カバラー的な信仰とスーフィー的な実践を併せ持つドンメー教団は、青年トルコ人革命（1908年）などトルコの近代化にもかかわっていくことになります。

マチェイコ先生の報告では、シャブタイ・ツヴィの改宗についての彼自身の書簡が扱われました。シャブタイ・ツヴィの改宗については、そのメシア運動全体を神学的に解釈したガザのナタン（Nathan of Gaza）の書簡がよく知られていますが、両者の見解は大きく異なっています。ナタンの書簡では、シャブタイ・ツヴィの改宗がユダヤ法とカバラーというふたつの観点から解釈されています。前者については、彼の改宗は「一時的な命令」（命の危険にさらされる状況で、ユダヤ法を破ること）、つまり強制的な改宗であるというもので、後者については、彼の改宗は悪の世界から神の光を救い出すための戦いのプロセスであるというものです。いずれにせよ、ナタンはシャブタイ・ツヴィの改宗が見せかけであり、イスラームへの信仰のゆえではないと説明しています。これに対し、シャブタイ・ツヴィ自身の書簡では、改宗は自分の意志によるものであり、イスラームこそが真の宗教であるがゆえであると説明されています。シャブタイ・ツヴィは、自分の知る真の神が、イスラームに改宗するよう自分に命じたのであると書いているのです。しかし、シャブタイ・ツヴィ自身の見解は排除されていき、ナタンによる解釈がシャブタイ・ツヴィのメシア運動の神学的な基盤を形成していくことになります。

メイル先生の報告では、東ヨーロッパにおけるシャブタイ・ツヴィの改宗についての物語（*Ma'orot Tzvi*）の講読がおこなわれました。18世紀後半以降、東ヨーロッパではシャブタイ・ツヴィについてのさまざまな物語が流布するようになります。それらはオスマン帝国で実際に起きたことというよりも、シャブタイ・ツヴィについての想像力豊かなイメージの源泉となるような物語でした。そして、そこで描かれるシャブタイ・ツヴィとは、ユダヤ民族に救済をもたらすという嘘を広めた「偽りのメシア」ではなく、真のメシアであり魔術的な力を持っていたが、それを使うことに「失敗したメシア」であるというものでした。東ヨーロッパのユダヤ教世界では、こうした虚構的な物語が現実のユダヤ人たちの宗教生活に

深く影響を与えていました。ハシディズムの祖とされるバアル・シェム・トーヴについても同様にさまざまな伝説が語られ、それらが広がっていくという現象がみられました。

質疑応答ではユダヤ学のさまざまな分野の学生や研究者から質問が寄せられ、活発な議論がおこなわれました。

文責：志田雅宏

